

膜下に注入し、3～24 時間に経時的に撮像を行った。一方、クエン酸 ^{67}Ga を静注し、リンパ節への取り込みを検討した。基礎的検討として、TLC にて $^{99\text{m}}\text{Tc}$ レニウムコロイドの純度、ウサギに静注した場合の体内分布の検討を行った。

対象は非食道疾患 9 例、食道癌 5 例である。

結果：TLC による $^{99\text{m}}\text{Tc}$ レニウムコロイドの純度は標識後 1.5 時間、4 時間でそれぞれ 89.5%、87.1% であった。ウサギに静注した場合、大部分が肝に取り込まれたが、フチン酸に比し腎からの排泄が多い印象を受けた。胃の描画も認められた。 ^{67}Ga 静注ではリンパ節転移の有無に関して全く情報は得られなかった。非食道疾患例では注入部位の差により、頸部リンパ節と腹部リンパ節が共に集積を示した群と、頸部リンパ節にのみ集積に示した群に分けられた。食道癌例では RI 集積所見と組織学的所見との間に関連を見い出せなかったが、高度リンパ節転移例で注入部位よりの RI の移動がみられない症例を認め、リンパ節転移の存在を強く疑うことが可能であった。

$^{99\text{m}}\text{Tc}$ レニウムコロイドによる食道リンパ節シンチグラフィの問題点を示した。

今後さらに症例を重ねて検討したい。

38. RI リンフォグラフィによる下肢リンパ流動態の検討

仙田 宏平	小林 英敏	柿内 実
上村 孝子	岡江 俊治	児玉 行弘
石口 恒男	改井 修	松原 一仁
小原 健	大野 晶子	斎藤 宏
佐々木常雄	佐久間貞行	(名大・放)

RI リンフォグラフィから求めた関心領域の時間一放射能曲線より下肢リンパ流動態を検討した。

RI リンフォグラフィは、両足背皮内にそれぞれ約 2 mCi の $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -レニウムコロイドを注射し、その直後から 60 分間の鼠径部を中心とした画像データをシンチカメラにて収録した。次に、収録した 15秒/フレームの画像データから両側伏在静脈近位部ならびに鼠径リンパ節部に関心領域を設定し、それぞれの時間一放射能曲線を求めた。対象は腹部 RI リンフォグラフィを依頼された子宮癌、悪性リンパ腫など 6 症例で、その内 4 症例にて下肢の浮腫あるいはリンパ管造影異常を認めた。い

ずれの関心領域でも、時間一放射能曲線は比較的明瞭な立ち上がりを示した。また、鼠径部リンパ節部曲線は時間の経過とともにプラトーを呈したが、伏在静脈近位部曲線は比較的明瞭なピークを示し、時間の経過とともに下降した。この傾向は皮内注射部位を大腿遠位部とした場合により明瞭であった。一方、伏在静脈近位部曲線においては、いずれの症例も脈状または階段状波形を示した。6 症例における左右の伏在静脈近位部曲線の立ち上がり(出現)時間、ピーク時間ならびに脈状または階段状波形の出現程度を調べたところ、下肢の浮腫あるいはリンパ管造影異常と関連のあることを認めた。今後さらに症例を増やし、連続サブトラクションを加えて報告したい。

39. 骨シンチグラム($^{99\text{m}}\text{Tc}$ -MDP)にて病巣を描出し得た興味ある症例の検討

安田 鋭介	吉田 宏	市川 秀男
金森 勇雄	木村 得次	松尾 定雄
樋口ちづ子	(大垣市民病院・特放セ)	
中野 哲	北村 公男	綿引 元
武田 功	(同・二内)	
佐々木常雄	石口 恒男	(名大・放)

われわれは、 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -MDP による骨シンチグラフィーにて描出し得た骨外集積例を 7 例経験し、今回、特に自然経過中に石灰化した胆管癌および抗癌剤投与中に石灰化した興味ある症例を呈示し、若干の文献的考察を加え報告した。

骨外集積 7 例の内訳は、胆管癌 1 例、直腸癌肝転移 2 例、胃癌肝転移 1 例、直腸癌肺転移 1 例、S 字状結腸肺転移 1 例、胃癌リンパ節転移 1 例であり、なお、集積部位は、肝 4 例、肺 2 例、リンパ節 1 例であった。組織型は確認し得なかった 1 例を除き全例腺癌であり、分化の程度に一定の傾向は認められなかった。Ca の確認は単 X 純線と CT によったが、単純 X 線では 1 例のみ、CT では 4 例中 3 例に High density として認められた。Ca 沈着の発生経過は 2 例が自然経過中、5 例が抗癌剤投与中の症例であり、Ca 沈着の原因の一つに抗癌剤の作用が考えられた。リン酸化合物の集積機序は、Ca との関連が重要視され、壊死、変性組織への石灰沈着、いわゆる dystrophic calcification との結合により集積像を呈するものと推定された。